

ところであるが、台湾のものについては、結局、タイザンイワギキョウ *A. uehatae*, ニイタカシャジン *A. morrisonensis*, サイヨウシャジン *A. triphylla* の3種を認めることにした。サイヨウシャジンは、葉が輪生すること、花盤が円筒状であること、花冠が小さいことなどによって、前者との区別は明瞭であるが、タイザンイワギキョウとニイタカシャジンの間には区別困難なものがしばしば現れる。タイザンイワギキョウの最も普通な形は、草丈は低く、葉は卵形で、花は茎頂に1, 2個つけるものであり、ニイタカシャジンの普通な形は、丈は伸長し、葉は細長く、花序ものびて多数の花をつけるものである。花部の形態には、これといったちがいはみつからない。このような草丈や花序の大きさは、前者が 3000 m 以上の高山の風衝地、後者が 3000 m 以下の叢林の周辺部を主たる生育地とすることと関係がある。つまり、このような本来の niche を逸脱して生育する個体では上記の一般的な姿が失われて、両者は接近し区別がつきにくくなるというわけである。そこで、両者の重要な相異点として茎の毛の有無を考えてみた。茎の毛が本属全般にわたってどのような意味をもつかは検討する必要があるが、今、茎に逆向きの硬毛をもつ群をタイザンイワギキョウ、無毛であるかわずかに開出する散毛をもつ群をニイタカシャジンとして区別すると、前者は雪山山系および南湖大山から卑南主山に至る中央山脈の高山全域に分布するが、後者は玉山および阿里山周辺に限定され、先の垂直分布域の相異とともに、水平分布域の相異が明瞭にでてくる。この意味において、太魯閣附近の石灰岩壁からのニイタカシャジンの記録は特筆すべきものと思われる。タイザンイワギキョウは、日本のミヤマシャジンやヒマラヤの *A. coelestis* に類縁が求められたが、この形質を使うことによって、明確に区別できると思う。

本属植物の染色体数については、杉浦 (1942) が、 $n=17$ および $n=51$ を報告しているが、台湾産のサイヨウシャジンとタイザンイワギキョウでは、ともに、 $2n=34$ を数えることができた。

○高等植物分布資料 (42) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (42)

○ホロムイソウ *Scheuchzeria palustris* L. この周極分布種は冷涼なミズゴケ湿原に生えるので、本州での産地は少く、従来関東北部以北に報告されていた。最近に井波一雄氏が岐阜県大野郡と吉城郡との境界、天生(アモウ)峠に見出された ($36^{\circ} 15' N$, $136^{\circ} 58' E$)。これは信州を飛ばしての産地で、日本に於ける西南限地であり、同時に *var. americana* を度外視すれば、世界での南限と言えるかもしれない Hultén, *The Circumpolar Plants* 1: map 149, 1964 を参照)。しかし信州での産地を知ったので報告して置きたい。北安曇(アズミ)郡神城(カミシロ)村佐野の通称を親海(オヨミ)という小湿原がそれである。($36^{\circ} 37' N$, $137^{\circ} 50' 48'' E$) 海拔 740 m で天生峠よりずっと低いが、姫川源流地点の一つで清冷な小流を廻らし、他にも数種の北方系植物を産する。

(水島正美)